

別冊 太陽

初山 滋

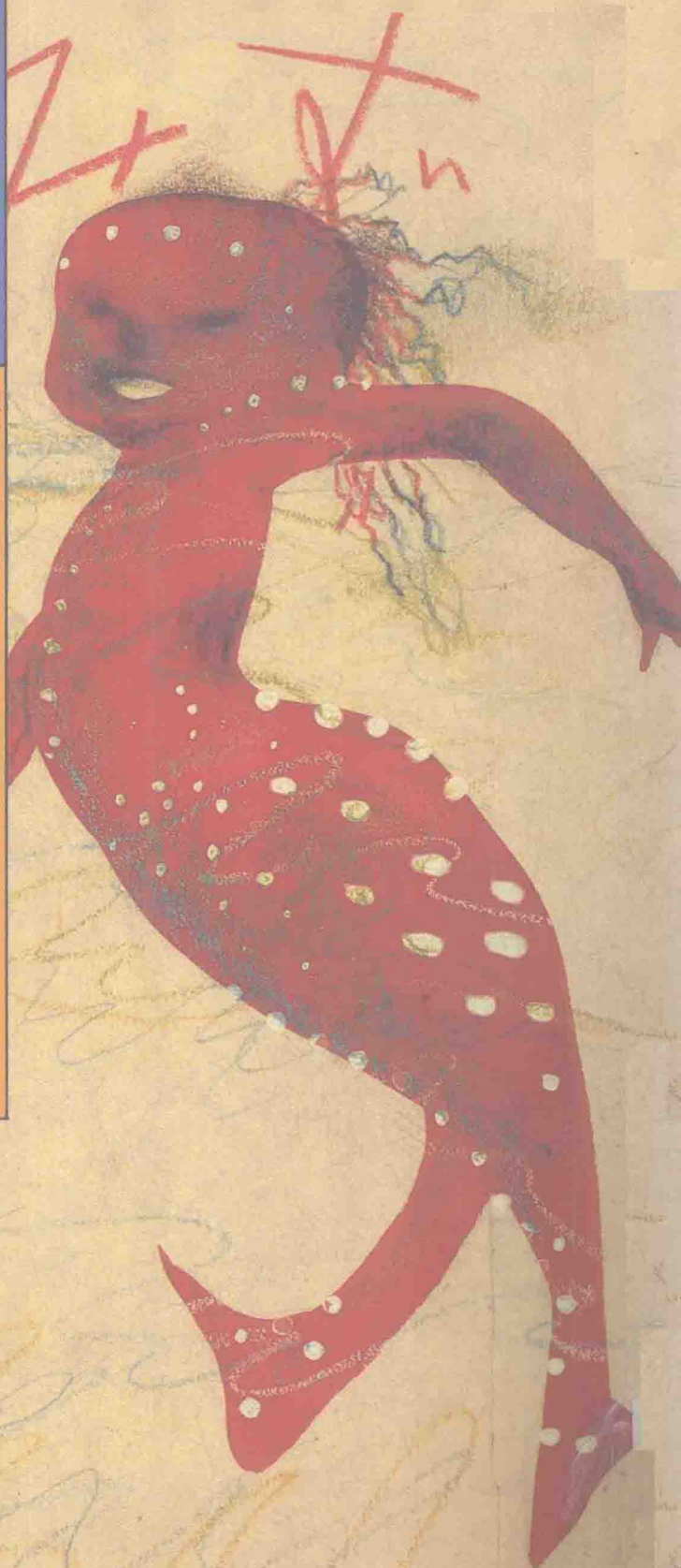
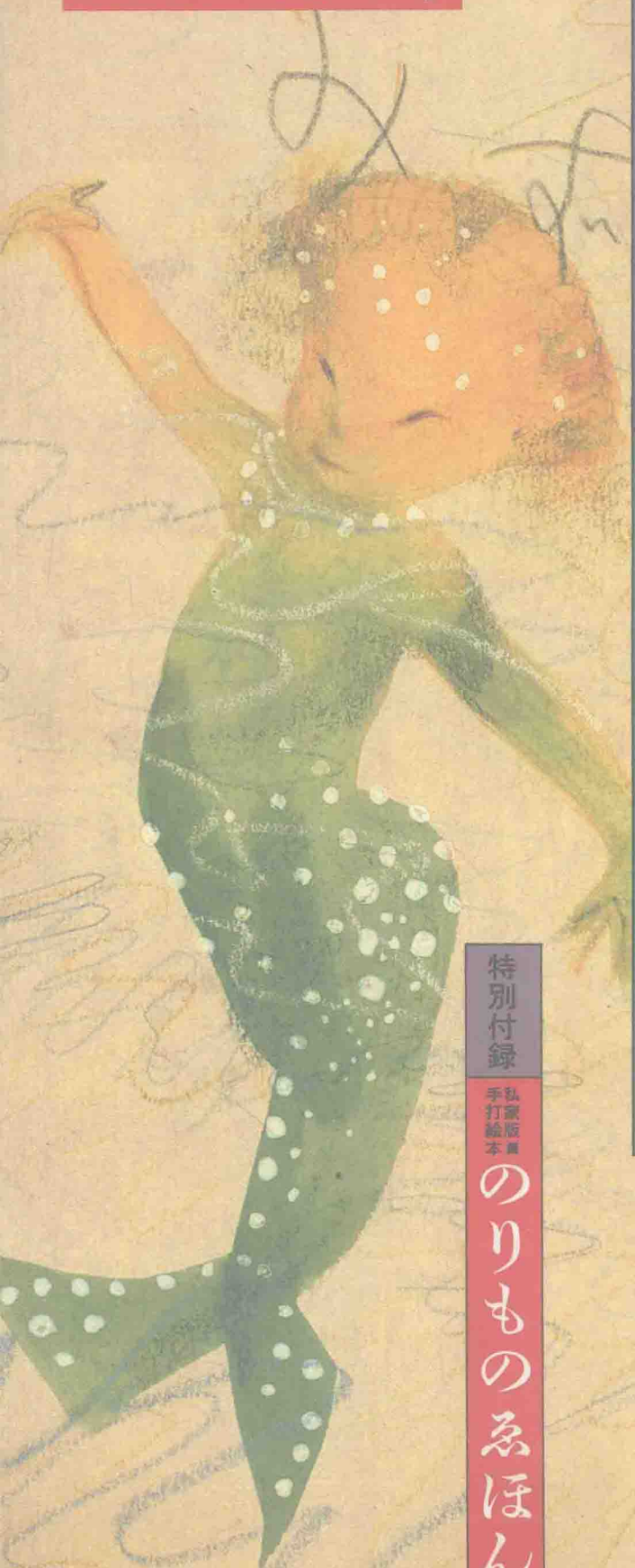
線と色彩の詩人

絵本名画館

特別付録

私家版
手打絵本

のりものゑほん



詩 色 緑 初
 山 花
 と
 新
 の



詩集の歌「小学少女」(初) 昭和十一年六月五日
 (昭和十一年六月五日)



初山滋 線と色彩の詩人

巻頭エッセイ 初山さんをはげます小人―岸田衿子

線と色彩の詩人

繊細な描線、淡い色、初山滋ファンタジー

ロマンのめばえ

虹の世界への旅立ち

こども聖書 旧約物語 一八 聖書のロマンを絵筆に託す

初山滋のファンタスティックワールド 二八 おとぎの国の扉を開くとき

アンデルセン童話集 二八 マッチウりの少女、おやゆび姫……

青い鳥 三四 幸せを求めてさまよう幼い兄妹

たなばた 四〇 にじんだ色味が語るはかない恋

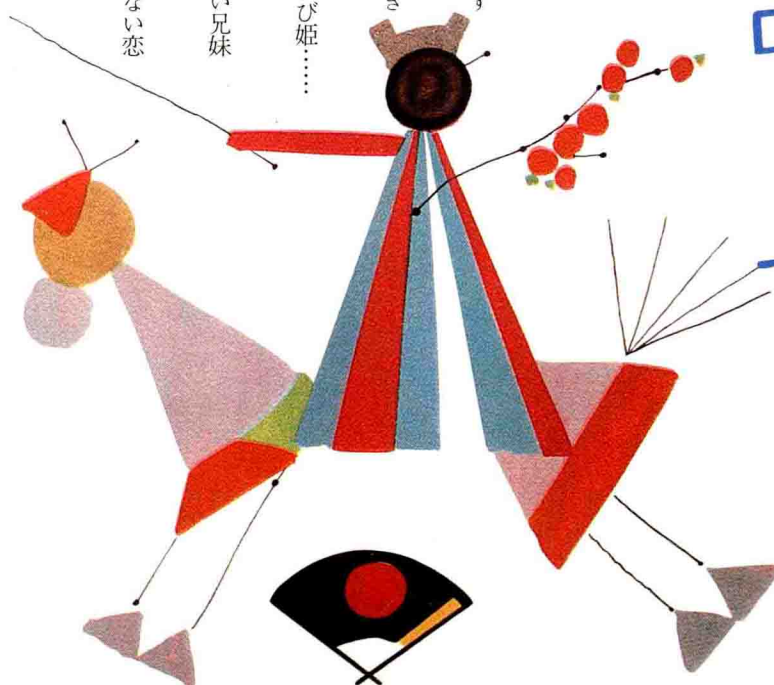
四四 夢師の本領を発揮する

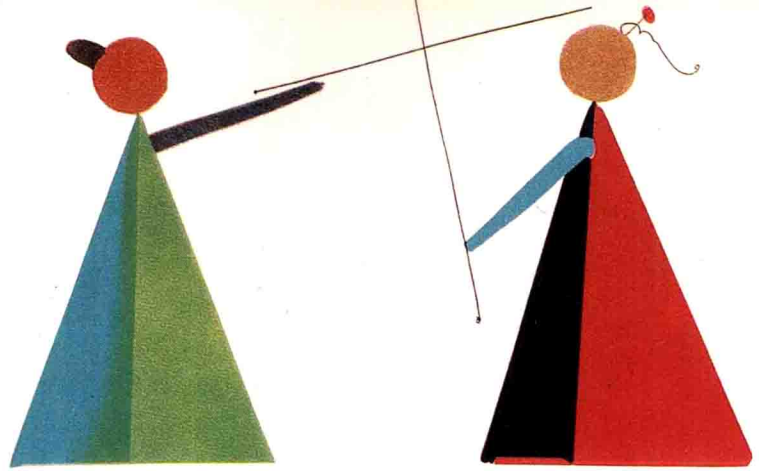
夢を紡ぐ円熟期

初山滋童話集 五四 コドモノクニ傑作集 絵雑誌の黄金期を築いた力作を集めて

西遊記 七三 白と黒が奏でる、妖しく、華麗な美の幻想曲

漫画。ヘコ・ポン・ポン 七九 ユーモアの中に、ぴりりと諷刺をきかせて





初山滋装幀集

モダンで親しみのある装幀の美学を問う

八三

おとぎの世界

八六

出世作となった童話雑誌の表紙

小学校の教科書

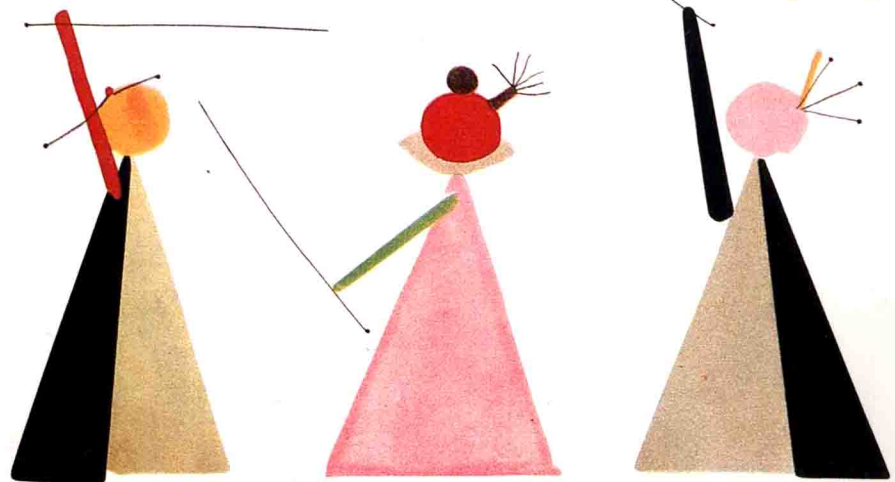
八八

懐かしい教科書の表紙絵を一同に

虹色の揺り師

アール・ヌーヴオーの香気と江戸っ子の粋と

九〇



夢追人の休日

〇二

余技作品集

箱、年賀状、蔵書票……気ままな美の散策

作品論

二二

洋風童画から浮世絵の現代化へ——初山滋の出發と到達点——岡田隆彦

評伝

二七

華筆・初山滋の生涯 堀尾青史

初山滋年譜

三三

初山滋著作目録抄

三四

次号予告

三六

奥付

特別付録

〇

私家版 手打絵本

のりものゑほん

カバー誕生(昭和一五年頃)

大扉『雲雀の歌』小学少女(研究社 太正一〇年六月号)

目次『たたかひ』ゴドモノクニ傑作集(東京社 昭和一〇年四月)

アートディレクション『佐藤 浩・野村俊夫

編集『高橋洋二・久田 肇・秋山礼子・岡みどり

小島貴子・澤田陽子・鈴木道子

校正『大木かおる

写真『石田重次郎・本誌写真部

初山さんをはげます小人

岸田衿子

いま私の手許に、『はくちょうのみずうみ』という一冊の絵本があります。初山さんの絵に、私がつけた絵本で、子どもの頃憧れた画家と組むことができた、嬉しい思い出のある絵本です。

「こども音楽館」と銘うったこのシリーズは、レコードと絵本を組み合わせたもので、ほかに『ヘンゼルとグレーテル』とか、『ピーターと狼』などがあつた筈です。「白鳥の湖」といわれた時、バレエや音楽では親しまれていても、絵本としてはわかりにくく、小さい子の悦ぶものとは思われず、少しためらいました。お菓子の家や、動物が登場する物語ならば子どもは興味しんしんでしょうが、白鳥と王子やお姫様というのは、むしろ少女たちに好まれるものです。

「絵描きさんは、どなたになるんですか？」と聞くと、

「初山滋先生です」という答えでした。

「え？」私は空耳かと思ひ、たしかめました。編集者は同じ名をくり返しました。

「あの方は亡くなった方ではないんですか」私は失礼なことをいったことにも気づかず、「生きていらつしやるんですか？」と、しつこく聞いてしまいました。今から一五年も前のことです。

その時目のまえには、子ども時代に出会つた溢れるような画家の色彩や、ふしぎな線描きの画面が、ぐるぐる回りだしました。「書かせて下さい」と、小さい声で呟いていたのは、嬉しさに怖いような氣持が入り交つていたからです。

本ができあがつて二、三年後に、今度は本当に、初山さんは亡くなられてしまいました。絵本の中の、ジークフリートやオデッタの動きに、バレエの姿態をとり入れてあり、白鳥の姿にも踊り子たちのしぐさが影絵のようにだぶつて描かれてあつて、はつとしました。この渾然とした美しさは幼い子には少し無理かもしれませんが、画家の蘊蓄の深さに驚いたものです。

子どもの頃家にあつたわずかな児童雑誌の挿絵、童謡の絵本などで、初山さんの絵は、ほかの誰よりも華やかで、透明で、しかも謎の多い画面でした。鳥、獣、子どもの形が、それとわかりながら、模様のように描かれた線の遊びと、とび交う色彩の洪水とで、私たちの目は魔法をかけられたようになつてしまふのでした。

この魔法の魅力がわかりかけたのは、私が画学生になつた頃、それとも卒業して、また初山さんの

童画にふれる機会があった頃だと思います。おもに学生

時代は、油絵の少し厚ぼったいタブローばかり見ていまし

たが、病気をし、油絵が体力的にも合わなくなっていた頃

でした。展覧会向きの、うさん臭い作品にも疑問を感じていま

した。詩をつくり、子どものための絵本の文章を書きはじめ、童

画をもう一度見なおしていた頃でもありました。

武井武雄や村山知義など、「ゴドモノクニ」の画家たち

の絵が、なぜ面白かったのか、初山滋がなぜふしぎだったの

か、わかってきました。わかるというより、絵を描く立場か

ら眺めるようになっていたようです。

ある時、「りすの木」という題でしたか、細い枝の先

まで一列に、しだいに小さくなってゆくりすを並べて描

いた絵を見て、この画家の小動物を捉える眼と筆力が並大抵のものではないことがわかりました。

花びらの下で眠るおやゆび姫、それを三つ指について、おじぎするみたいに覗きこむ蛙の親子に、

私は感動したばかりか思わず笑ってしまいました。この笑いは正しいと思いました。写真に裏打ちさ

れ、そこをつきぬけたユーモア。初山滋の視線に、生きものへの熱いくらいの愛情が籠っていたこと

はもう、まちがいありません。

十代で染物の図案を描き、日本画を習ったことから、初山さんの装飾性、デザイン感覚の豊かさを

指摘する声を聞き、私もそれに賛成です。そのうえ、童画として大切な、小動物の生態への興味を人

一倍もついていた方だと思っています。

魔法使いにもバレエの姿態をとり入れた画家は、沢山の子どもたちを描くとき、手足の動きに踊り

のしぐさをさせて、それが走るような筆のはこびと一つになり、画面にみずみずしいリズム感を加え

ることになりました。

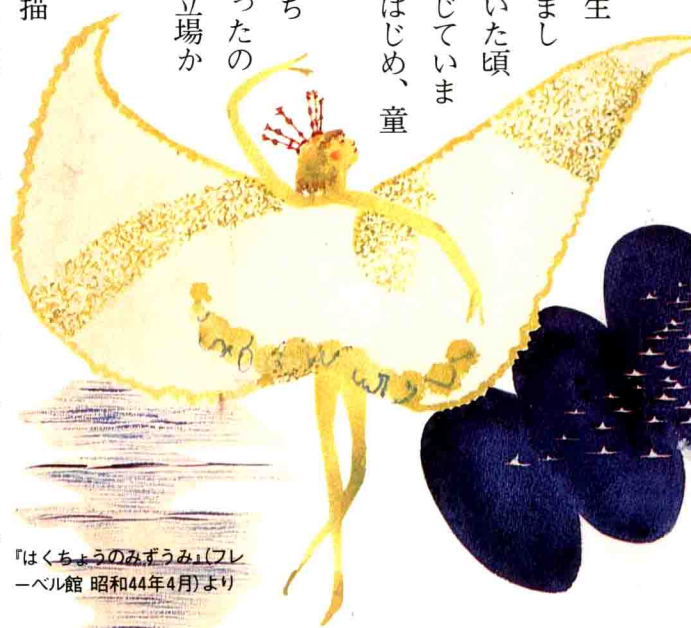
「絵本『白鳥の湖』の各画中に、小人の楽人をちらした。チャイコフスキーの名曲のむこうを張るつ

もりはない。絵の中に視覚で音を——そんな試みとしてあしらってみたまで。印刷の出来を気にしな

からこれを書く」

『はくちょうのみずうみ』につけた「画家の言葉」です。初山さんの沢山の画面にちらばる妖精のよう

な小人たちは、楽器を奏でたり、ダンスをしながら、ずっと画家をばげまし続けていたと思われます。

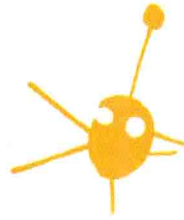


『はくちょうのみずうみ』(フレイベル館 昭和44年4月)より

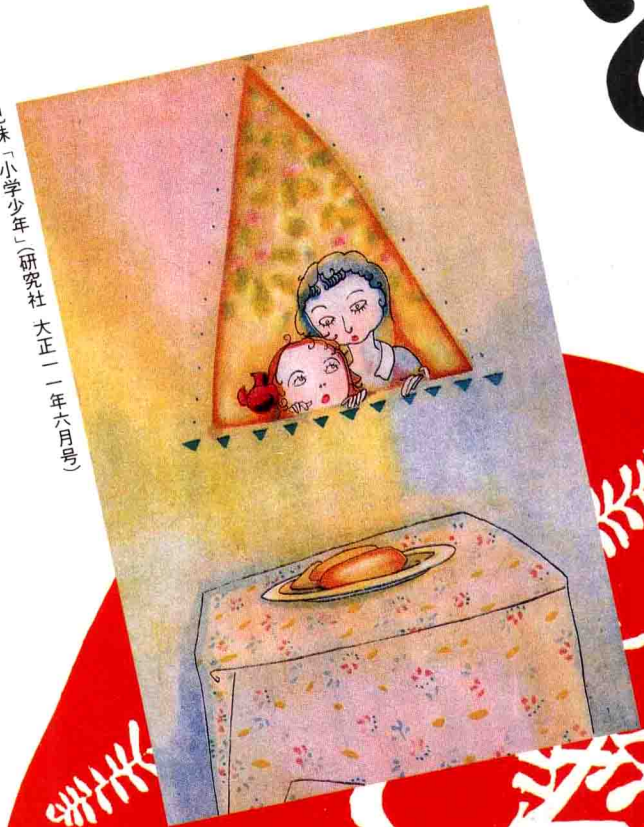
糸と

母

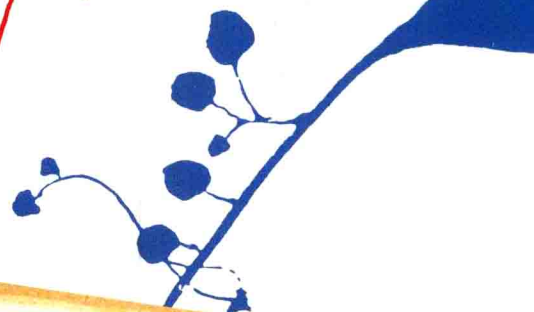
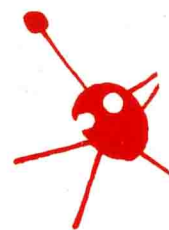
糸



兄妹「小学少年」(研究社 大正一一年六月号)



詩



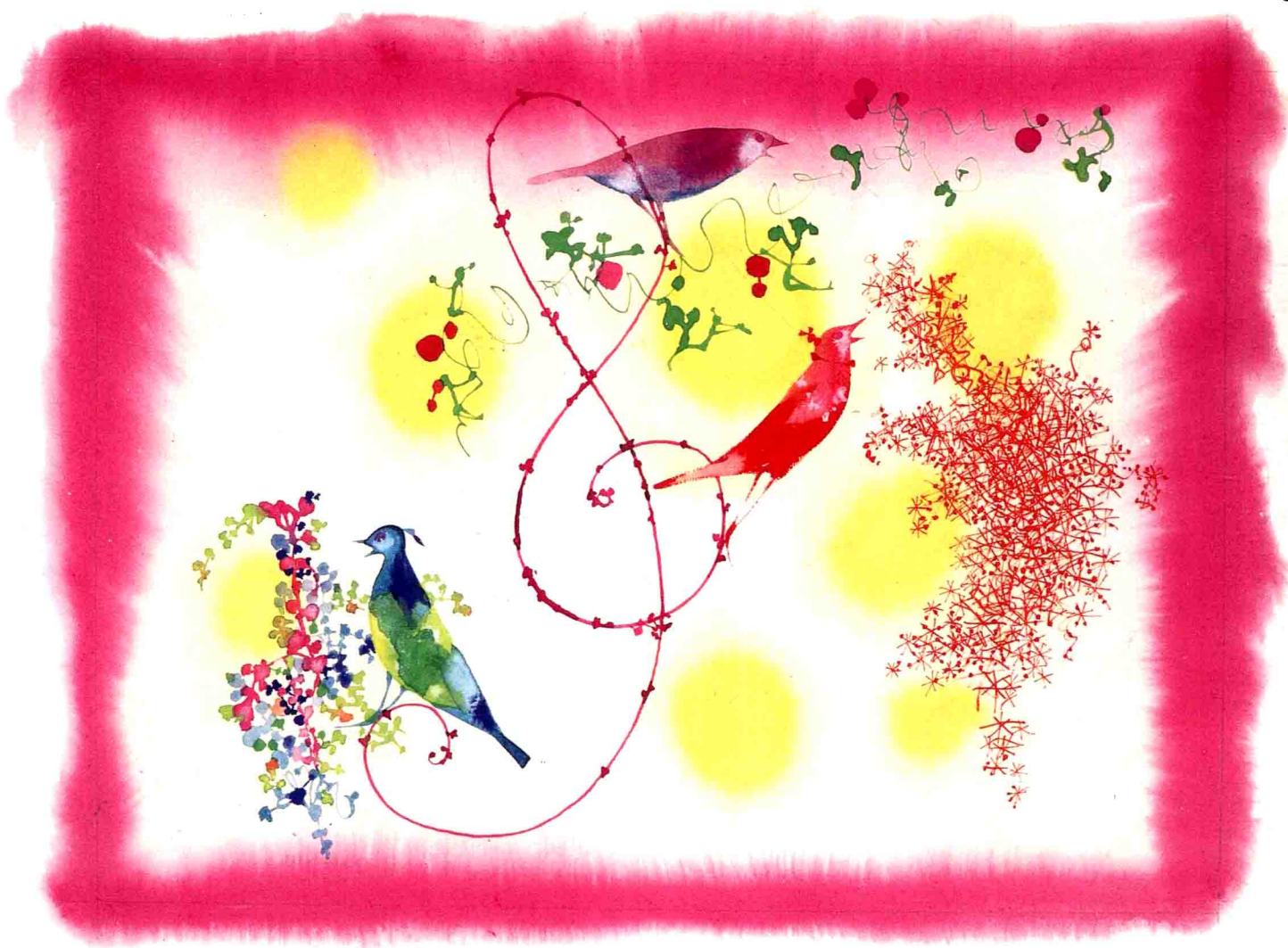
● ロマンのめばえ
● 夢を紡ぐ円熟期

五つぶのゑんどう豆『アンデルセン童話集』(児童書房 昭和5年2月)

1930

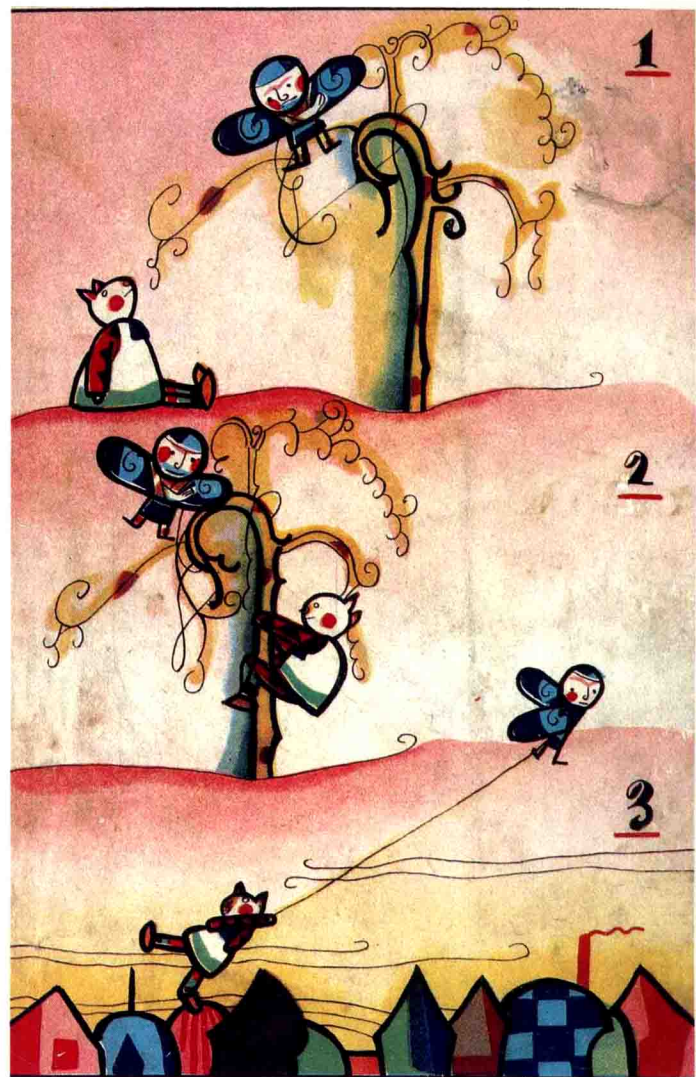
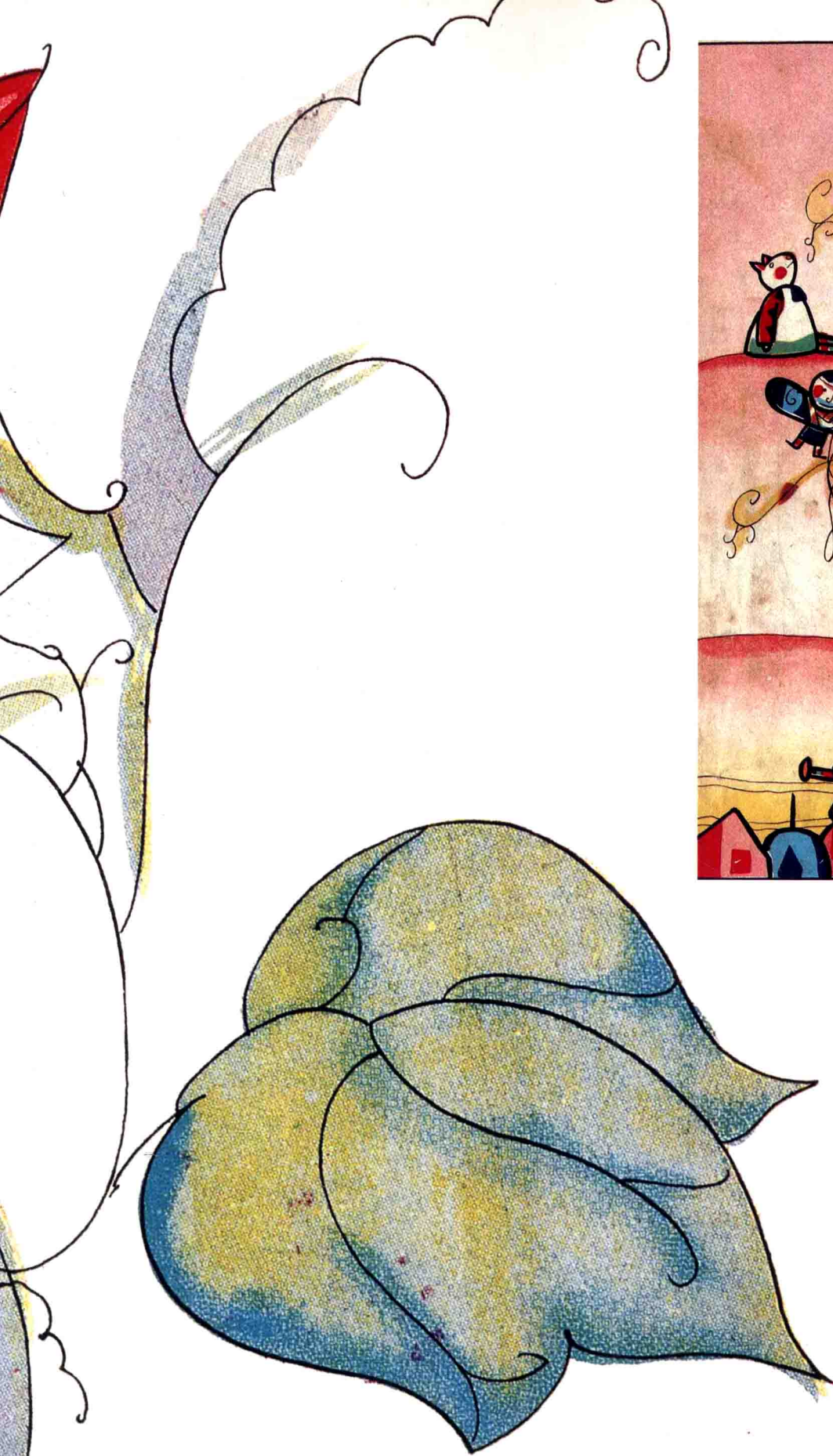
●ロマンの めばえ

涙の跡のように、淡くにじんだ色調、柔
らかくうねる水草のような描線——初山
調としかいいようのない独特の美しさは、
大正・昭和と続くその長い画業の、ごく
初期から現われている。



原題不明(昭和5年頃) 原画





たことねこ「小学少年」(研究社 大正15年1月号)の裏表紙



ホッキョクタンケン「小学少年」(研究社 大正15年2月号)の裏表紙





お月さまの話「小学少年」
(研究社 大正11年10月号)



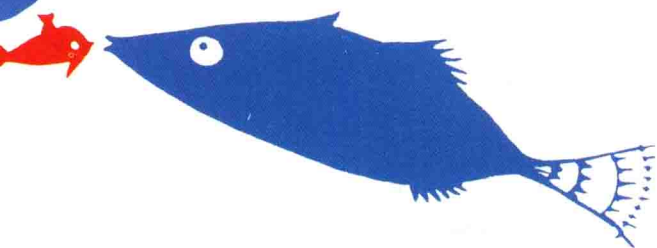
狐の腹つみ「小学少年」(研究社 大正10年4月号)



兄妹「小学少年」(研究社 大正11年7月号)



杉林「小学少年」(研究社 大正一四年七月号)



お天気「小学少年」(研究社 大正一四年五月号)





原題不明(昭和25年頃)